



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

### 第59号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0072  
東京都千代田区飯田橋 1-5-7  
東専堂ビル2階

電話：03 (6380) 8943  
FAX 03 (6380) 8952  
https://ireikyou.com  
振替口座 00140-6-334930

編集人 國澤輝生  
発行人 國澤輝生  
印刷所 (株)SG初スホルディングス

### 目次

安倍昭恵会長就任挨拶	1
令和5年度合同慰霊祭斎行	2
ノモンハン事件	
(六) 作戦終結・事件の総括	6
硫黄島における遺骨収集活動について	12
事務局からの報告等	14
靖國カレンダーの紹介	16

## 会長就任のご挨拶



安倍昭恵会長

した。

本協議会の持つ社会的意義の重要性や本協議会創立に尽力され代表を努めてこられた故瀬島龍三氏、故山本卓眞氏や島村宜伸前会長の後を引き継ぐことの重責に躊躇も致しましたが天国から亡き夫、安倍晋三が支えてくれるものと信じてお引き受けすることにしました。

慰霊関係諸団体、公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会会員・役員並びに関係者の皆様には日頃から当協議会の活動に多大のご協力ご支援をいただき心から感謝申し上げます。

私こと安倍昭恵は、関係各位のご推挙に基づき令和5年度第1回通常理事会並びに令和5年度定時評議員会の議決・承認を経て令和5年8月1日から本協議会会長に就任することとなりま

戦場へ赴かれたご子息やご主人の勇敢闘と無事のご帰還を願う日々を過ごされたご家族の心中をお察しすると今なお心が痛みます。

これらの尊い犠牲が礎となつて我が国の平和と繁栄があることに思いを致すとき戦没された方々に対し敬意と感謝の念を忘れることなく慰霊の誠を捧げ次の世代に伝えていくことが今の時代を生きる私たちのつとめと考えております。

しかしながら長い歳月の経過とともに先の大戦においてかくも多くの犠牲が払われた事実さえ知らない人々が増え続けていることも事実です。

また、長年戦没者慰霊事業に携わつてこられた戦友やご家族の皆様の高齢化、更には鬼籍に入られる方々の増加傾向も避けられない事実です。

令和五年八月一日

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 安倍 昭恵

# 令和五年度大東亜戦争全戦歿者合同慰霊祭

## 令和5年度合同慰霊祭斎行

### 慰霊祭準備

新型コロナウイルスの猛威による諸制約のため、令和2年度から昨年度まで規模を縮小して斎行せざるを得なかった。しかし、本年に入り爆発的なパンデミックから抜け出しつつあるように見受けられたため、戦後78年となる



靖國神社の朝の慰霊祭

「令和5年度合同慰霊祭」は、4年振りに令和元年度以前の実施要領に進じて実施する方向で準備に着手した。

具体的には、慰霊諸団体代表のみならず、会員各位にも広く参加を募り慰霊祭を実施すること、直会についても急激な感染再拡大が発生しない限り実施すること、靖國神社をはじめとする関係諸団体等と調整を開始した。

6月上旬、実行委員会ではコロナ禍以前の実施要領で開催が可能と判断し、関係する慰霊諸団体及びその他の招待者等に案内状を発送した。



等代表団体諸慰霊に臨む式典

合同慰霊祭主催各団体をはじめ賛助会員等関係者の協力を得て、慰霊祭当日までに多くの参加申込をいただいた。

また、合同慰霊祭当日については、以前であれば7月上旬は梅雨末期の集中豪雨の時期であることに留意しなければならなかったが、近年顕著になってきた地球環境の変化に伴う異状気象による影響のためか、猛暑による熱中症が心配された。

### 式典

このような中で実施された本年度の合同慰霊祭は、気温はぐんぐん上昇したものの、風通しの良い靖國神社社殿は涼やかで熱中症の心配は無かった。



唱歌斉国による全員者参列

式典は、慰霊諸団体代表を始め、参加を希望した会員等98名が参列し正午に開始された。

神職の司会でトランペットの伴奏（堀田和夫氏）により全員起立して国歌を斉唱した後、神職による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が進められた。

祝詞においては、慰霊諸団体合同主催の趣旨に鑑み、夫々の団体の戦没者への思いを込めて、当協議会参加慰霊45団体の団体名が奏上された。

次いで山下輝男協議会理事長が協議会参加諸団体を代表して次掲の祭文を奏上し、今後も慰霊諸団体と連携し戦没者慰霊の永続に努力することを誓つ



上奏文祭理事長輝男山下

# 祭文

令和五年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙げるにあたり、戦没者慰霊諸団体を代表して、謹んで全戦没者の御霊に慰霊の言葉を捧げます。

大東亜戦争においては、多くの皆様  
が祖国と同胞の安寧を願ひ、アジアの  
解放と繁栄を実現すべく、北は酷寒不  
毛南は酷暑瘴癘人跡未踏の密林などの  
各地へ赴き、勇戦敢闘されましたが二  
百三十数万余柱に及ぶ将兵の皆様が幽  
明境を異にされました。家族を故郷に  
残し、故国に思いを残しつつ散華され  
た皆様方のご無念とご遺族の悲痛に思  
いを致す時、今なお万感胸に迫るもの  
があります。今日の我が国、そして国  
民が享受する豊かで平和な生活とアジ  
ア諸国の独立と発展は皆様方の献身が  
礎石となって築かれたものであること  
を忘れることはできません。

しかしながら平和と繁栄が続いた八  
十年を迎えんとする長い歳月が経過し、  
皆様とともに戦い我々を導いてくださっ  
た戦友の方々も徐々に数少なくなる中  
で戦没者に対する国民の慰霊と感謝の  
思い並びに先人が遺された我が国古来  
の伝統的美徳が風化しつつあることが  
憂慮されます。  
私ども大東亜戦争全戦没者慰霊団体

協議会は、戦没者慰霊諸団体と相携え

て戦没者慰霊事業の永続と、それを通

じての国民道義の作興に寄与すること

を目的としております。あの夏の暑い

日から八十年を迎えようとする今こそ、

大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわ

れた全戦没者の勇気と献身を、そして

生還された戦友が皆様のご加護を得て

懸命に成し遂げた戦後の奇跡の復興を

思い起こし、正しい歴史と崇高な精神

の継承をはかり、先人から託されたこ

の美しい国の平和と繁栄に邁進すべ

く覚悟を新たにすることがあります。

また、百数十数万余柱に及ぶ未だご帰還

を果たされていない戦没者のご遺骨の

ご帰還についても、遺骨収集事業に携

わる組織の一員として、お一人でも多

くの方々に故国にお帰りいただけるよ

う全力を尽くして参ります。

どうか私どもになお一層のご加護と

お導きを賜りますことを冀つて慰霊の

言葉と致します。

令和五年七月八日

戦没者慰霊諸団体を代表して

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

代表理事 山下輝男

た。

なお、本慰霊祭に際し、靖國神社で

の慰霊祭には出向けないが、在宅のま

ま靖國神社に向かい参拝したいとの申

し出と共に玉串料をお寄せいただいた

「在宅参拝者」が今年も国内外合わせ

95名と3団体を数えた。

これらの方々は、祭文と共に神前に

奉納する「参拝者名簿」に記載し、参

列者と在宅参拝者を合わせ195名の

名簿を神前に奉納させていただいた。

次いで奉納演奏（ナレーター大穂園

井氏）が行われた。

まず、4年振りに参加いただいた世

田谷男声カルテット「ガバーガバ」の

皆様による「夏の思い出」、「椰子の

実」2曲の歌が奉唱され、美しい男声

4重唱のハーモニーが御霊に届けられ

た。

次いで、堀田和夫氏によるトランペッ

ト吹奏により「同期の桜」が奉納され

た。

最後に参拝者一同で雄々しく戦場に

散つて逝かれた戦没者に思いを馳せつ

つ、「海ゆかば」をトランペットの伴

奏で斉唱、歌声は神苑にこだました。

その後参拝者一同は、本殿に昇殿参

拝、慰霊団体代表の玉串奉奠に合わせ

て拝礼した後、「国の鎮め」のトラン

ペット演奏の中、しばしの黙とうで戦



堀田和夫氏による奉納演奏



世田谷男声カルテット「ガバーガバ」による献歌

**直会**

式典を終えて、参拝者一同靖国会館に移動し、2階の会場「九段・玉垣・田安の間」において1315からご来賓、参加各団体代表、賛助会員、JYMA学生等68名が参加して直会が執り行われた。

直会は、当協議会伊藤専務理事の司会により進められた。

最初に、当協議会を代表して山下輝男理事長が挨拶に立ち、本日の式典が滞りなく厳粛かつ盛会裡に終了できたこと、斎行に当たり参加各団体から絶大なご支援・ご協力をいただいたことに対し感謝の意を表するとともに、今後とも戦没者慰霊事業の永續のためご



**山下輝男理事長挨拶**

支援賜りたい旨の挨拶が述べられた。

次いでご来賓の靖國神社山口建史宮司から靖國神社崇敬奉賛に各団体から寄せられている協力・支援に感謝の意が表されるとともに、コロナ禍以前の状況に徐々に戻りつつあること等についてご紹介をいただいた。

続いて、本日参列の協議会参加慰霊団体代表の紹介と、式典には統合幕僚長、陸・海・空各幕僚長代理の現役の自衛官にもご参加頂いたことが司会者から報告された。

次に本日参列の慰霊諸団体を代表して一般社団法人日本郷友連盟会長森勉氏が壇上へ登壇され、ご挨拶を兼ねて献杯の御



**山口建史靖國神社宮司挨拶**



**森勉日本郷友連盟会長による献杯**

その後、和やかな雰囲気の下、懇談会食は1時間余に及び、戦没者慰霊にかける思いが同じ者同士、戦没者への思い、お互いの慰霊活動や遺骨収集活動等を語り、意義深い懇談の場を過ごした。

懇談会食の終盤、式典において献歌をいただいた世田谷男声カルテット「ガバーガバ」から、メンバーの紹介及び楽曲の披露をしていただいた。

最後は堀田和夫氏のトランペット演奏に合わせ、戦没者を偲びつつ全員で「海ゆかば」を斉唱して締めくくられた。



**全員で「海ゆかば」を斉唱**



**ガバーガバによる楽曲披露**

合同慰霊主催団体

- ・公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
- (以下五十音順)

協会

- ・公益財団法人隊友会
- ・筑後地区偕行会
- ・公益財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

- ・公益財団法人海原会
- ・英霊にこたえる会
- ・英霊の志を継承する会(永代会員)

- ・エラブカ東京都人会
- ・公益財団法人偕行社
- ・鹿児島偕行会
- ・神奈川県偕行会

- ・旧戦友連(永代会員)
- ・熊本偕行会
- ・熊本歩兵第225聯隊戦友会(永代会員)

- ・熊本歩兵第225聯隊戦友会(永代会員)
- ・群馬偕行会
- ・国民保護協力会(永代会員)
- ・埼玉偕行会
- ・佐賀県偕行会
- ・NPO法人JYMA日本青年遺骨収集団
- ・震洋会(永代会員)
- ・公益財団法人水交会
- ・全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会(永代会員)
- ・全国近歩一会(永代会員)
- ・全国甲飛会(永代会員)
- ・全国ソロモン会
- ・全国メレヨン会
- ・一般社団法人全ビルマ会
- ・ソ連抑留戦友遺族会東京ヤゴダ会(永代会員)
- ・公益財団法人太平洋戦争戦没者慰霊

- ・航空自衛隊退職者団体つばさ会
- ・一般社団法人東京郷友連盟
- ・東部ニューギニア戦友・遺族会
- ・特攻殉国の碑保存会(永代会員)
- ・公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会
- ・豊橋歩兵第18聯隊戦友会(永代会員)
- ・一般社団法人日本郷友連盟
- ・ネービー21
- ・ハワイ明治会
- ・姫路偕行会(永代会員)
- ・福井県偕行会(永代会員)
- ・福岡県偕行会
- ・宮崎県偕行会
- ・山口県偕行会
- ・陸士第53期生会(永代会員)
- ・陸士第57期同期生会(永代会員)

参拝者名簿

- 赤木 衛 赤木 智歩 足立 晴夫
- 新井 捷王 池上 均 池田 礼薦
- 池田 縁 石井 光政 石黒 彰洋
- 石山 航 一戸 弥生 伊藤 隆
- 今村 奎太 岩田 司朗 植木 茂光
- 内田 一生 梅木 一美 圓藤 春喜
- 及川 昌彦 大澤 正幸 大谷 智香
- 大塚 芳啓 大橋 武郎 大穂 園井
- 岡部 俊哉 笠井 多りこ 笠原 優紀

在宅参拝者名簿

- 片岡 正徳 金川 大希 金子 敬志 緒方 威 緒方 繁代 小田原 健児
- 加茂 陸己 岸良 和典 北村 直昭 小沼 愛 織田 邦男 加藤 三千夫
- 衣笠 陽雄 工藤 雅敏 國澤 輝生 狩野 隆平 川崎 昌彦 河野 克俊
- 黒瀬 洋 小熊 正昭 小島 健二 河野 宏 川又 弘道 菊地 珠未
- 小橋 恵美 齊藤 治和 坂下 勝代 木村 圭作 熊谷 國彦 久米 俊郎
- 坂下 淳子 佐瀬 正博 志賀 政雄 黒木 伸男 呉 正男 反田 勇一郎
- 篠原 永子 清水 悟 神保 明生 小林 博行 小林 稔 齊藤 文彦
- 神保 仁士 杉澤 敬子 杉本 順則 神枝 宗男 佐久田 昌昭 佐藤 秀幸
- 鈴木 久美子 住田 陸快 反町 佳生 高崎 啓一郎 清水 典郎 神野 義孝 杉口 源一郎
- 田井 宏幸 高岩 利彦 竹之下 和雄 高橋 芳幸 武田 健策 田尻 利重
- 高沢 孝 高橋 義洋 中井 真人 多田野 弘 舘本 勲武 田中 襲
- 竹本 佳徳 徳丸 伸一 中村 宏 辻 外文 成山 和功 西嶋 正幹
- 中川 法宏 中村 剛 橋本 孝一 花田 耕一 野本 純 野本 恒雄 橋本 光彦
- 新原 稜一 橋本 孝一 速水 美智子 火箱 芳文 橋本 龜 島間 成允 早瀬 登
- 早田 翔大 福井 正明 藤原 利親 藤原 淳悦 布施 木昭
- 吹野 昇治 藤原 幸生 古庄 幸一 堀田 和夫 松原 きよみ 水野 博文 山崎 文夫 山本 真也
- 藤田 幸生 藤原 則夫 藤原 利親 堀田 和夫 山田 朱美子 山本 勝久 吉川 洋利
- 藤原 淑子 古庄 幸一 堀田 和夫 松原 きよみ 水野 博文 山崎 文夫 山本 真也
- 本多 賢也 前嶋 三木 法和 柳澤 壽昭 山田 耕一 山田 朱美子 山本 勝久 吉川 洋利
- 松本 剛 三木 法和 柳澤 壽昭 山田 耕一 山田 朱美子 山本 勝久 吉川 洋利
- 森 勉 柳澤 壽昭 山田 耕一 山田 朱美子 山本 勝久 吉川 洋利
- 山下 輝男 山田 耕一 山田 朱美子 山本 勝久 吉川 洋利
- 湯川 武弘 吉原 凜汰朗 若木 利博 山本 勝久 吉川 洋利
- 若松 重英 渡 正人 (以上合計98名)

(以上合計98名)

公益財団法人海原会  
 東部ニューギニア戦友・遺族会  
 一般財団法人全国強制抑留者協会  
 (以上合計95名・3団体)

# ノモンハン事件 (六) 作戦終結・事件の総括

岩田 司朗

## 1 交戦力の破断界を迎えた拠点陣地の戦闘

### (1) フイ高地

第23師団は、同高地が陣地の北翼の要点であり、将来第6軍がこの方面から攻勢に出る場合においては、好適な支撐となることから、搜索隊を配置していた。

その守備兵力は、搜索隊及び支援部隊として歩兵2中隊、連隊砲、速射砲、工兵1中隊が加わっていた。歩兵、工兵中隊は本来工事支援部隊であったが、ソ蒙軍の攻勢発起とともにそのまま搜索隊長の指揮下に組み込まれた。

これに対しソ蒙軍の兵力は、狙撃連隊、戦車旅団、装甲自動車旅団、榴弾砲連隊、対戦車砲大隊各1のほか、外蒙1コ師団が北翼を警戒して間接的圧力を及ぼしていた。更に21日にはバルシヤガル高地の背後に突進する任務を帯びた戦車大隊、装甲自動車、空挺旅団各1が北翼につき込まれた。

これらソ蒙軍は20日の攻勢開始から、フイ高地を四周から完全に包囲して攻撃すると共に、有力な狙撃及び機甲部

隊をもつて間隙及び外翼から、わが側背に殺到する気配を示した。その戦力格差は1対10〜20であり、搜索隊は5日間で73%の損害を受けほとんどの戦力を喪失した。

当時、上級司令部の指揮官、幕僚らは、全員攻勢方面に集まり、その方面の対策に迫られ、最北端のフイ高地への考慮は払われていない。また22日夜以来搜索隊に対する弾薬等の補給は途絶し、且つ同隊と師団司令部間の電話線は切断され、翌23日16時以降、無線機も破壊され、フイ高地は文字通り全くの孤立状態に陥っていた。

20日以来、搜索隊はソ蒙軍の重囲に陥りながら白兵戦による一進一退の攻防で陣地を保持したが、その攻勢の重圧は、特に背後方面において強く、拠点は刻々背面から失われ、23日には陣地の後半部の至る所に赤旗が立つようになった。同日夜、部隊長井置中佐は、全隊に出撃を命じ、各隊はそれぞれ当面のソ蒙軍にかなりの損害を与えたが、大勢を左右するに至らず、しかも指揮部下諸中隊には出撃はしたものの、陣地に帰還できない隊があった。

24日天明時、ソ蒙軍の一部は本部幕舎付近に進出し双方に死闘が繰り返され、搜索隊両中隊長以下将兵の大半は死傷、第2中隊は残兵4〜5名に過ぎない状態となった。

かくて井置中佐は指揮下部隊長の意見を聴取し、フイ高地を脱出して後図を策するに決し、16時準備を命じた。部隊は25日2時過ぎ前進を開始、ソ蒙軍の間隙を縫うようにして北方に向った。部隊は整齐と且つ可能な限り負傷者を同行しての脱出行で、途中ソ蒙軍の監視網に衝突し、また戦車の急迫を受けたが危地を脱して、26日將軍廟に

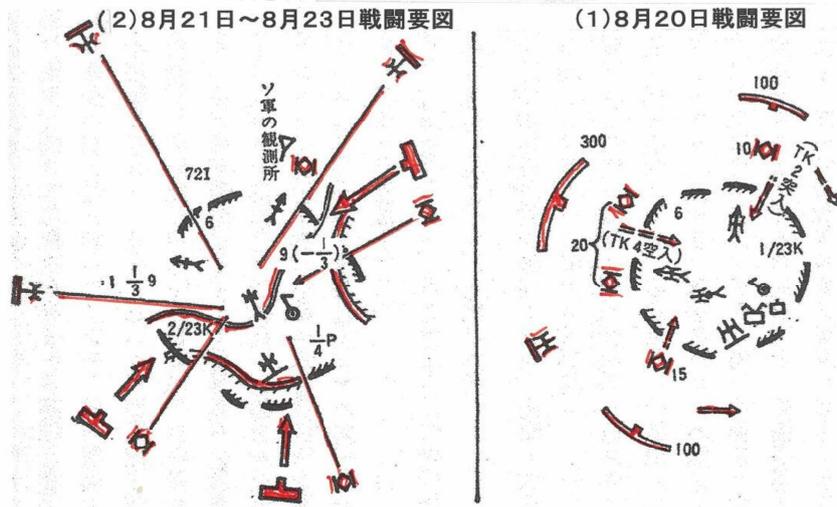
到着、軍命令によりオボネー山の守備についた。

なお、ソ蒙軍司令官ジュークフは井置部隊の善戦を率直に「我々が想像した以上に頑強」と評価する一方で、この正面の攻撃を担当した北方軍司令官を解任した。

### (2) ノ口高地

8月早々第8国境守備隊において編成された長谷部支隊は、歩兵2大隊と1中隊、速射砲、連隊砲、迫撃砲等で編組された部隊で、8月6日ノ口高地進出、梶川大隊(歩兵第28連隊)を指揮下に入れ、同高地を中心とする正面約6kmの陣地守備を担当した。この正面に向

搜索隊戦闘経過概要図



かつ右隣接の狙撃師団の少なくとも3分の1以上及び戦車旅団約1とみられ、彼我の火力格差は著大で、その攻撃よりはまさしく圧倒的であった。

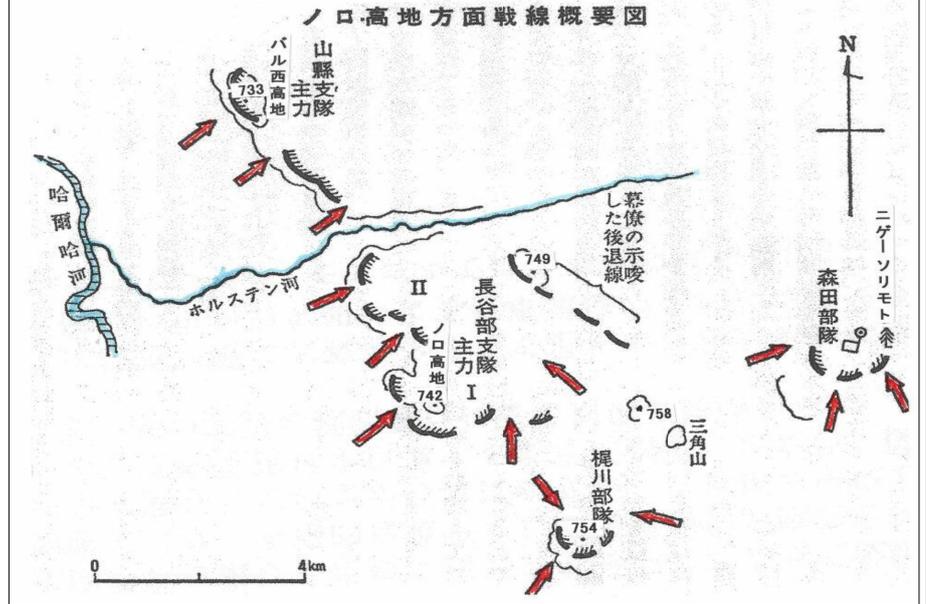
第6軍は攻勢転移の成果の拡大を狙うため、支隊の左翼側にあつた森田(徹)部隊を抽出するに決したが、森田連隊長の裁量により1大隊だけの差出しにとどまったものの、支隊の左側背は急激に弱化し、23日にはソ蒙軍の歩戦部隊は

傍若無人に側背に迫り、またホルステン河谷を横行するようにになった。

24日からの攻勢転移は失敗し、ノロ高地及び同東側地区の強化に対し何等の手も打たれず、かくして孤立した防御力は遂に26日破断界に達したものとみられる。歩兵第28連隊第2大隊を含む長谷部支隊の死傷状況に関する細部の記録はないが、死傷率は約70%に達し、また本来100名内外の勢力を有する各中隊の大部は30数名に低下していたであらう。

この間の戦闘で、ノロ高地前面陣地を死守していた梶川大隊は、砲撃が終わった後に肉薄してきたソ蒙軍歩兵に対し、大隊長自ら銃を射ち手榴弾を投擲するまでに追い詰められながら何度もソ蒙軍を撃退し続けた。

26日通信連絡手段が全く途絶した状況下で、長谷部支隊長はいよいよ最後の時機が迫ったものと考え、重要書類を焼却し、諸隊に決死敢闘を訓示した。この時における支隊長の意図は、師団の攻勢転移が失敗した今日、座して全滅を待つより、数日前幕僚から示唆さ



れた高地に至り、758高地付近に存在が予想される森田部隊と提携するところこそ師団に貢献する道であるというものであり、この日21時、「749高地から758高地北東側砂丘付近にわたる線を占領する」旨の命令を下達した。支隊主力の現守備陣地と後退すべき地線までの距離は約3〜4kmであった

が、優勢なソ蒙軍が充滿する中での大隊ごとの夜間での行動であり、できる限り負傷者を收容しての敵前退却であった。

果して諸隊は目標を誤り連絡を失し、且つ当初の編組が分離し、そのうえ優勢なソ蒙軍から激しい攻撃を受けた。27日夜再び窮地を脱するため後退を続けたのち、28日ようやく「泉」東方砂丘西側付近で増援としてやってきた第7師団の部隊と合流、爾後軍参謀の指示により、梶川大隊等第7師団関係部隊は本属に復し、第8国境守備隊関係部隊は、モホレヒ湖東側地区に対する掩護警戒に任せられることになった。

26日にノロ高地の戦況が最後の段階に達すると、その東方で同様に苦闘していた歩兵第71連隊主力の命運も尽き、連隊長森田大佐がソ蒙軍の重機関銃の銃撃を受け戦死した。8月8日に連隊長に着任して僅か18日後であった。

### (3) バルシャガル西高地

山縣支隊の防御担任は、キルデゲイ水付近から731、733両高地を経るホルステン河北岸に至る約8kmの正面であった。

支隊は山縣部隊及び生田大隊計歩兵4大隊を基幹とし、野砲兵連隊、野戦重砲兵連隊、独立野戦重砲兵連隊等が協力して守備に任じていた。

しかしソ蒙軍の攻勢が開始されるや、これら砲兵は熾烈な砲爆撃を受け、ま

た特に側背から殺到する優勢な機甲部隊に対する自衛戦闘に迫られ、防衛砲兵としての本来の火力を奮揚することができずに終わった。

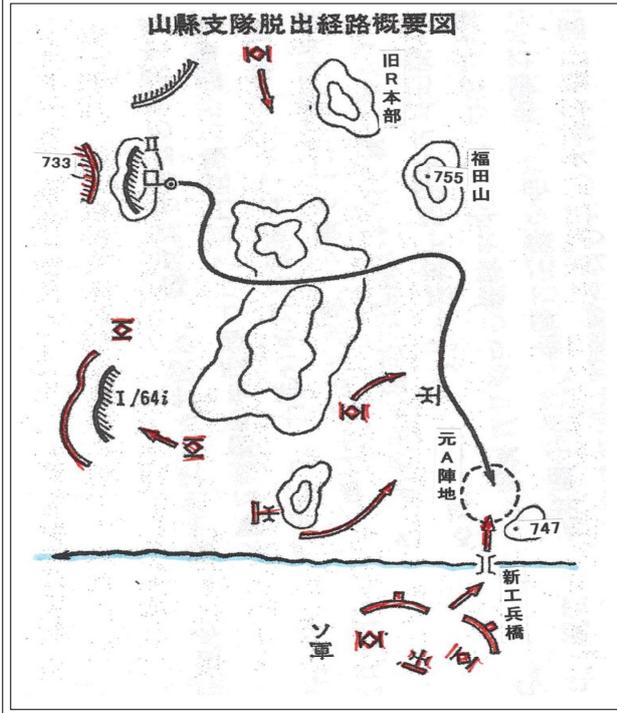
この正面に対し、ソ蒙軍は機械化狙撃師団、狙撃機関銃旅団各1を充當するとともに、21日には戦車大隊、装甲自動車旅団各1を増強し、これら優勢な兵力をもって正面及び右側背を激しく攻撃してきた。ことに24日夜からはノロ高地方面から北方打撃兵団が側面背後に迫って来たほか、ホルステン河谷からも有力な一部が出現しわが側背に襲いかかり、その彼我の火力格差は、搜索隊、長谷部支隊の場合と類似したもので、山縣支隊全体の死傷率は60%余に達し、またバルシャガル高地の砲兵諸隊の損耗率は70〜75%という景況であった。

山縣支隊本部と師団司令部間の有線電話は8月23日朝から不通勝ちとなり、爾後の連絡は主として無線によつていたが、その無線も28日16時以降不通となった。

山縣支隊長は、小松原師団長の指揮する救援隊は28日には陣地付近に来るものと解していたが、救援隊はその夜になつても来着せず、一方、第一線の戦況は刻々危機を加え、ソ蒙軍の歩兵、戦車はわが前方30m内外まで迫り、ことに733高地の戦況は最後の関頭近きと思わせるものがあつた。

ここに於いて山縣支隊長は、所在の野砲部隊長伊勢高秀大佐と協議して、主力に合流するためノモンハンに向い後退するに決し、29日2時頃撤退命令を下達した。恰も29日天明時、小松原救援隊はようやく山縣支隊の陣地付近に頭を出し始めたが、不運にも山縣支隊及び伊勢砲兵部隊は入れ違いに守地を撤したのであった。

山縣支隊主力は行動開始後間もなく天明を迎え、やがてソ蒙軍に見見され、混戦ののち諸隊はほとんど分散した。そして山縣、伊勢両連隊長等は新工兵橋付近に於いて日本軍が構築した掩体内に孤立し、狙撃兵及び戦車の包囲攻撃を受け、遂に両連隊長以下悲愴な戦



死を遂げた。

## 2 作戦末期における関東軍等の統帥

### (1) 8月末頃の現地軍の企図

#### ア モホレヒ湖付近における第6軍の状況

第6軍が8月末頃に新作戦のため選んだモホレヒ湖南端付近の陣地は、従来の戦場の北縁に連なり、当時のソ蒙軍攻勢ぶりを考慮すれば、極めて脆弱な陣地線であったが、第6軍としては、新来の兵団の集中掩護のための陣地を占領させ、ソ蒙軍に対しその進出距離を少しでも短小にして、もって戦勝感を少なくし、またわが第一線に対しては、軍戦闘司令所は一步も退かない事実を示して、極力消極感を抱かせまいと考慮したものであった。

8月末日、第7師団主力によるモホレヒ湖付近の集中掩護陣地の編成は一応形態が整い、第23師団の前線部隊もようやく全部の後退を終わらせた。また、阿爾山方面から進出すべき第2師団の一部(片山支隊)は既にハンダガヤ付近に到達し、後続第4師団の輸送

も順調に進捗していた。

## イ 関東軍の反撃企図

関東軍は第6軍の攻勢転移が失敗に終わった事態に鑑み、なるべく多くの兵力を集中し、反撃を加えることに決した。

地上の増加兵力は第1師団、第2師団、第4師団、第8師団戦車1連隊、山砲1連隊等であった。しかしながら、その歩兵の人員がかなりの数に達しても、関東軍としての火力は依然、当面のソ蒙軍に対して、格段の劣勢であることは自認せざるを得なかった。

9月初めころの諸隊の展開要領その他作戦の具体案は未定であったが、相当地な縦深を有する陣地を如何にして突破すべきかが重大な課題であった。夜襲によつてソ蒙軍陣地の間隙は突破できても、地域の奪取は容易でなく、翌天明後、多大の損害を被ることについては、既に我として7月中旬以来、経験済みであった。

### (2) 作戦終結に関する処置

ソ蒙軍の8月攻勢が開始された時、大本営はこの機会に相手に一撃を加えたのち、軍を係争地区外に引き揚げることを意図した。戦況は当初有利に進展しつつあるように見えたが28、29日頃の戦況によれば、作戦は順調を欠き関東軍の対策は次々と後手となり、事態は急速に悪化の方向に進んでいるよ

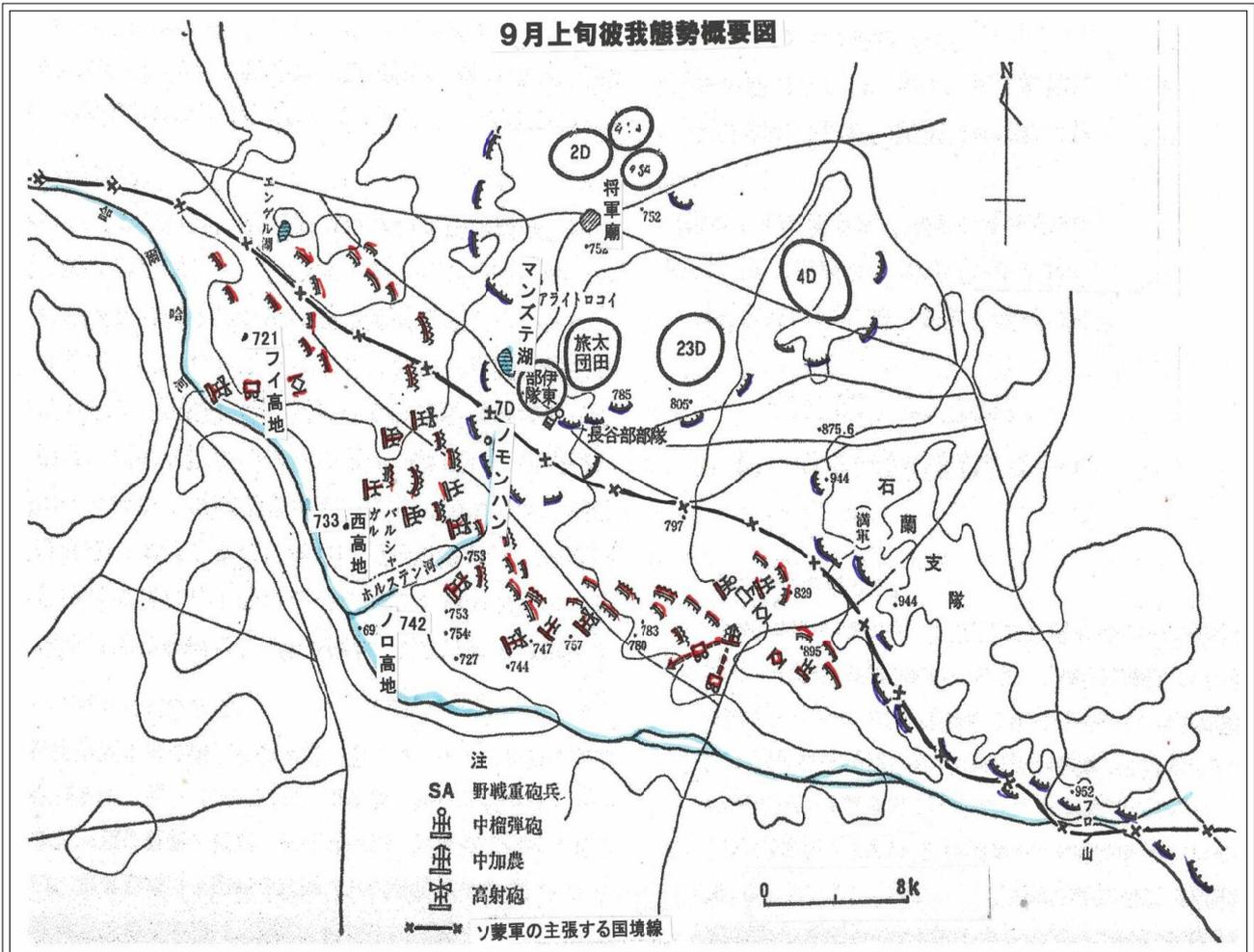
うに見受けられた。

当面のソ蒙軍の大部が、その主張する国境線から進出する気配を見せず、且つ第6軍自ら既に係争地区外に後退する意図を固めつつあるにも拘らず、関東軍は作戦終結を考へることなく、かえつて第23師団に対する弔い合戦の意味をもつて、大兵力を戦場に注ぎ込んで決戦を企図し、場合によっては翌春まで作戦を持ち越すなどの意図さえ表明するに至つた。

以上の事態に鑑み、事件終結に向かつての動きが進み始め、8月30日、作戦終結に関する大命が関東軍に伝えられた。しかし徹底的に攻勢を決意する関東軍の考え方との間に大きな開きがあり、その上大命の表現が明確さを欠いていたため、中央が意図するその真意は現地に伝わらなかつた。

大本営は、改めて攻勢中止を端的に明示した大命を仰いで、関東軍にその実行を要求した。この第2の大命をめぐつて大本営作戦課と関東軍との間に激しい応酬があつたが、結局この命令によつてノモンハン作戦は終止符が打たれ、また大本営における次長及び作戦部(課)長と、関東軍における参謀副長以上及び作戦幕僚全員の顔触れが一新されることとなつた。

このころ、欧州においては独ソを中心とする風雲はようやく急を告げるに



至り、わが陸軍部内でも事件の終結と世界情勢の変動を機とし、日ソ間の国交の正常化を求めようとする空気が濃化し始めるようになった。

### 3 作戦終結

#### (1) 人事異動

ノモンハン事件の責任の所在を明らかにする人事異動は、9月7日の発令に始まって10月に及び、参謀本部の次長、第1部長、第2課長と、関東軍参謀副長以上の3首脳並びに第1課高級参謀以下全作戦参謀の陣容が一新された。

第23師団については、師団の善後処理が一段落した11月、師団長らの更迭が発令された。

#### (2) 停戦協定

ノモンハン事件を收拾しようとする動きは、7月中旬頃から日本政府内部で台頭し始め、9月3日、欧州に動乱が発生するに至り、停戦問題は急速な歩み寄りを見せ始めた。当初彼我の主張に食い違いが大きく、なかなかまとまらなかったが、ようやく9月15日に至って原則的事項取り決めに合意が成立し、9月16日共同発表が行われた。

現地停戦協定は、9月16〜17日に予備交渉、18日〜23日まで6次にわたり本交渉が実施された。

交渉の結果に基づく戦死者の搜索及び収容は、9月24〜30日の間に行われ、わが方は4,386体を収容し、以後打ち切りとされた。

捕虜の交換については9月27日第1次としてわが方から87名を返還し、ソ蒙側から88名を受領した。その後、種々の経緯を経たのち、昭和15年4月27日ソ蒙側の捕虜2名とわが方の捕虜116名との交換が行われ、この問題の決着を見た。

#### (3) 悲壮な自決

第2次ノモンハン事件の最後の段階において、第23師団の独立部隊隊長のうち、山縣、伊勢両連隊長は戦場において自決した。

やがて、停戦協定が締結されるに及んで、酒井、井置、長谷部の3部隊長と搜索隊配属の辻清中隊長が従容として自決の道を選んだ。

戦場における攻勢が功を奏しなかったことや、独断守地を撤したことに對し、自ら命を断つて武人としての道義を明らかにしたものであった。戦場における行動は、尽すべきを尽した上の結果であったのに、なお且つ及ばずとしての決意の発露であった。これは当時の軍の風潮が多分に作用したものであったが、悲愴を超越したものといえよう。

#### (4) 研究委員会の設置

ノモンハン事件後、中央部はその重大性に鑑み、国軍の戦力、戦備万般にわたる改善資料を得るために研究委員会を設置、11月中旬以降、主として新京及び海拉爾で、中央任命の各委員と関東軍以下現地関係者により研究討議が行われ15年1月、報告書が提出された。

「戦略戦術」部門に対する総判決は、「国軍伝統の精神威力をますます拡充するとともに、低水準にあるわが火力戦能力を速やかに向上せしめるを要する」というものであつて、火力装備を拡充すべき問題については、「今日まで久しい間、火力の必要性が強調されながら逆に実現を期し得なかつたのは、窮極するところ第1次大戦の経験を有せず、単に文献によつて研究したのにとどまつた私の認識不足が、不知不識の間に実行を不徹底にしたからである。今後は、今次の機会に得られた火力に対する正当な認識に基づいて、編制装備、補給、技術、教育訓練等、あらゆる部門に対して飛躍的進展を期さなければならぬ」と論じており、火力戦即ち物的戦力の重要性を強調している。

しかしながら、「赤軍は物質偏重であり、そのため攻勢が緩慢となり、なお近接戦闘においては衝力を欠く傾向にある」とも述べており、これらの教

訓は残念ながらその後の戦略戦術に活かされなかつたとみるべきであろう。

#### 4 本事件の総括

##### (1) 日ソ両軍の損耗

本事件をめぐる戦闘における日本軍、ソ連軍の戦闘損耗は、次表のとおりである。

日ソ両軍の損耗状況

航空機 (機)	戦車等 (両)	損耗率 (%)	死傷者計 (名)	戦 傷 (名)	戦死等 (名)	動員数 (名)		
179	36	29.5	17,364	8,647	8,717	58,825	6 軍	日本軍
		70.3	10,646	5,321	5,325	15,140	23師団	
251	397	34.6	25,655	15,952	9,703	74,147	ソ連軍	

注：日本軍第6軍の損耗数には、第23師団の損耗を内数として計上している

(戦史叢書・ウィキペディア)

日本軍の損耗については、ノモンハン事件後のかなり早い時期に情報開示されていたが、大東亜戦争終戦後に研究者間で日本軍惨敗という評価が有力になると、日本軍の損耗も過大に見積もられるようになった。なかでも昭和41年10月頃に、大手全国紙によつて報道された靖國神社で行われた「ノモンハン事件戦没者慰霊祭」に関する記事で、「ノモンハン事件戦没者一万余人」と報じられたことで、日本軍は過小に損害を公表していると主張するものもあつたが、この記事は死傷者数約18,000人と戦没者数とを混同したものであるとみられる。靖國神社の慰霊祭祭文でのノモンハン戦戦没者数は7,720人となつている。

一方、ソ連は、従来イデオロギ的な宣伝のためあつて日本側の死傷者推定を大きく膨らませ、自軍の人的損失を故意に小さく見せようとしてきた。ジュコーフ報告書では死傷者数計9,284人、マルクス・レーニン主義研究所が編集した『大祖国戦争史(1941~1945)』では同9,000人といった、ソ連側のプロパガンダによる過小な損害数のデータが広く知れ渡り、ソ連側の一方的勝利が定説化する大きな要因となつた。

この定説もソ連の共産主義独裁体制が崩壊した1990年から、グラスノスチにより次々とソ連軍のかつての極秘資料が公開される度に、その人的損害が激増していき、これらの定説が大きく覆されて、ついには日本軍の損害をも大きく超えていたことが判明し、ソ連が情報を意図的に操作していたことが明らかとなつた。(『ウィキペディア』抜萃)

##### (2) 歴史認識

本事件をめぐる歴史認識について、ソ連が崩壊する前は、ソ連側の情報はソ連に情報操作された出典に頼らざるを得なかつた。1963年に邦訳が刊行されたソ連軍の公式戦史でのその人的損害が9,824人と過少評価されていたり、日本軍の損失が55,000人と過大に記述されていたりしており、ノモンハン事件は日本軍が約2倍・5倍の損害を被り惨敗であつたという評価が定着することとなつた。

ソ連寄りの恣意的な情報を頼りにせざるを得なかつたため、ノモンハンでの日本軍に対する評価は辛辣なることが多く、ソ連の情報公開前のノモンハン事件に対する日本国民の印象は、作家司馬遼太郎氏が下した「日本はノモンハンで大敗北した」という評価と変わらないものであつた。

1990年代以降、ソ連の崩壊に伴いソ連軍の損害が明らかになると、ソ連軍の損害を隠蔽して少なくていたことが明るみに出た。またロシア側により発見された史料による「日本側の被害」は日本側が公表している数値よりもはるかに多い人数を挙げており、互いに相手に与えた損害を過大に見積もっている。

日本軍は決して惨敗したのではなく、むしろ兵力、武器、補給の面で圧倒的優位に立っていたソ蒙軍に対して、粘り強く勇敢に戦った、勝つてはいなくても「ソ蒙軍の圧倒的・一方的勝利であつたとは断定できない」という見解が学術的には一般化したとされる。

また、ソ蒙軍司令官ジュエーフが、後日スターリンに引見され、ハルハ河の戦闘での日本軍について、「ハルハ河で戦った日本兵はよく訓練されている。特に接近戦闘でそうだ」「彼らは戦闘に規律をもち、真剣で頑強、特に防御戦に強い。若い指揮官たちは極めてよく訓練され、狂信的な頑強さで戦う。士官たちは、特に古参、高級将校は訓練練度が低く積極性がなくて紋切型の行動しかできないようだ」等と日本軍に対する評価を述べている。

これが「日本軍の下士官兵は頑強で勇敢であり、青年将校は狂信的な頑強

さで戦うが、高級将校は無能である」などと巷に流布され、日本軍批判に引用されることとなった。

ジュエーフが指摘するように、当時の大本営、関東軍、第6軍、第23師団の高級指揮官・幕僚に、日本国に行く未を決定するに卓越した戦略眼が見られず、自由意志を有する戦争相手国を侮り、根拠のない、唯我独尊的な直感でその行動を予測し、常に劣勢な戦力で戦うことを強要し、戦場で起きている戦況を冷静に観察し、第一線将兵が互角に戦える条件を整えてやることのできなかつたことが悔やまれる。

☆☆☆

日本の向かうべき方向を主導する地位にあつた彼らが、ノモンハン戦を通じて、近代戦における火力、機甲打撃力、航空戦力の意義・重要性、これらを継続発揮しうる国の保有すべき能力、列強の対抗能力、更には虚々実々の外交戦略等について、冷静な判断力を培うことができなかつたことが、その後の日本のかじ取りを誤つたということができよう。

(六)

残暑お見舞い申し上げます

公益財団法人 借行社

- 会長 志摩 篤
- 副会長 深山 明敏
- 相談役 熊谷 猛
- 相談役 森 勉
- 理事長 火箱 芳文
- 副理事長 岩田 清文
- 専務理事 内田 益次郎
- 事務局長 山越 孝雄

公益財団法人 水交会

- 会長 杉本 正彦
- 副会長 佐賀 幾雄
- 理事長 河野 克俊
- 専務理事 村川 豊
- 事務局長 徳丸 伸一

航空自衛隊退職者団体 つばさ会

- 会長 齊藤 治和
- 副会長 杉山 良行
- 副会長 片山 隆仁
- 副会長 福永 充史
- 副会長 藤田 信之
- 副会長 谷井 修平
- 専務理事 小城 真一

公益社団法人 隊友会

- 会長 折木 良一
- 理事長 岩崎 茂
- 常務理事 徳地 秀士
- 常務理事 岩田 清文
- 常務理事 山村 浩
- 事務局長 藤井 貞文

一般社団法人 日本郷友連盟

- 会長 森 勉
- 副会長 廣瀬 清一
- 専務理事 越智 通隆
- 常務理事 富田 稔
- 理事 袴田 忠夫
- 理事 佐藤 誠喜

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

- 会長 藤田 幸生
- 理事長 岩崎 茂
- 副理事長 岡部 俊哉
- 専務理事 石井 光政
- (兼事務局長)

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

- 会長 安倍 昭恵
- 理事長 山下 輝男
- 専務理事 伊藤 隆
- 事務局長 國澤 輝生

株式会社 SNA

株式会社 キャリアコンサルティング

駆逐艦菊月号 軍学堂

サスラポ株式会社

医療法人社団 伍光会

株式会社 青林堂

特定非営利法人 孫子経営塾

同台経済懇話会

PO法人 日本サイパン FRIENDSHIP 協会

株式会社 リアリ

## 硫黄島における 遺骨収集活動について

令和4年度硫黄島戦没者遺骨収集  
第4次派遣団員 野村 優子

令和5年1月30日から2月16日まで  
の間、令和4年度第4次硫黄島遺骨収  
集団に参加してまいりました。私にとつ  
て特別に貴重な経験となりました。

硫黄島までの道のりは非常に長いも  
ので、常にコロナとの根比べでした。

最初に「順番が回って来ましたよ」  
とお声をかけていただいたから、コロナ  
による人員半減のために2年の延期、  
さらに1次隊クラスター発生のため、  
令和4年9月から翌年1月への延期。  
12月30日に派遣内定通知書を手にした  
時の重みとやつとここまでたどり着け  
たという感動は忘れることができませ  
ん。

しかし、まだまだ安心はできません  
でした。ここから、外出の自粛と出発  
10日前より自宅での2回のPCR検査、  
新狭山ホテルでの2泊の自主隔離とそ  
の間2度の抗原検査、更に硫黄島到着  
後も宿舍の自室での丸一日の自主隔離、  
ようやく2月2日の朝5時の抗原検査  
でも陰性が確認され晴れて今回の事業  
に参加できることとなりました。

この間一度でも陽性反応が出たらそ  
の場で即派遣は中止されるといふ緊張  
状態が続いていたので、全てが無事完

了し遺骨収集団に参加できると決まっ  
た時の安堵感は今まで感じたことの  
ないものでした。

居室待機明けの2月2日、朝8時よ  
り天山「戦没者慰霊の碑」に於いて来  
島報告。新狭山ホテルでも出発前夜時  
短の結団式は行われたのですが、天山  
にて初めて派遣団員全員の顔を見るこ  
とができました。派遣団員は表1の通  
りです。

一般社団法人日本戦没者遺骨収 集推進協会（主催者）	4名
一般社団法人日本遺族会	4名
硫黄島協会	2名
小笠原村在住硫黄島旧島民の会	1名
特定非営利活動法人 JYMA日本青年遺骨収集団体	1名
公共財団法人大東亜戦争全戦没者 慰霊団体協議会（水交会はここに所属）	1名
特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会	1名
水戸二連隊ベリリュウ島慰霊会	1名
公益財団法人隊友会	1名
厚生労働省	2名
小笠原村在住硫黄島旧島民の会 （重機オペレーター）	4名
小笠原村役場	1名

表1 派遣団員

表記以外にも、陸上自衛隊より弾薬  
班2名と科学班2名が全日程作業に同  
行され、その他2月7日までは、国立  
科学博物館の坂上先生と研修生4名の  
特別参加もあり、遺骨鑑定や作業方針  
の決定など大変大きな力となっていた  
ことができました。この日は13時より全体ミー  
ティングが行われ、自己紹介と今後の  
作業の具体的な説明が行われました。

2月3日月曜日より、いよいよ作業  
開始です。具体的な日々のスケジュー  
ルは表2の通りです。

5:25	健康チェック（体温報告）
5:35	集合
5:40~6:00	朝食（鹿島食堂）
7:10	拝礼
7:15	集合
7:20	体操
7:30	午前作業出発
7:40	作業開始
10:30	作業中断
10:40	作業現場出発
11:35	集合
11:40~11:55	昼食（鹿島食堂）
13:20	集合
13:30	午後作業出発
13:40	作業開始
15:30	作業中断
15:40	作業現場出発
16:50	集合
16:55~17:15	夕食（鹿島食堂）
18:00	ミーティング
22:00	消灯

表2 日々のスケジュール

作業場所は米軍が作成したグリッド  
（180m四方の区切り、さらにその  
中がA-Yまで区切られている）に基  
づき、今回我々の4次隊は183Xと  
183Wという南側の海にほど近い地  
表を中心に作業を行いました。

作業は2班に別れ、遺族会・硫黄島協  
会・旧島民の会が1班、その他が2班  
となりました。

重機オペレーターの方々は期間中を通  
して島の北部の163Xの現場で抜根  
と掘削作業をされていました。

我々2班の初日は、183Wの地表  
9-11という場所での作業でした。

3次隊が発見していたものの、時間的  
理由で掘り出すことができなかったご  
遺骨の収集からでした。

地表に見えているご遺骨は、その上部  
から慎重に掘り出し、その周囲も慎重  
に探します。基本的には掘って土をふ  
るうという作業の繰り返しです。ふる  
いも網目の大きなものからはじめ、ご  
遺骨がありそうな地層の土や骨片があ  
る場合には目の細かい網目のもので行  
います。骨片はピンセットでできる限  
り拾い出し、可能な限り内地にお戻し  
できるよう尽くします。

私は見えているご遺骨から少し離れ  
た所から掘り始めたのですが、携行用  
の折り畳み剃刀と腕時計の文字盤を見  
つけました。これはこの近辺に兵士の  
日用品袋があるのではと思ひ掘り続け  
ていると、何か硬い物がゴロっと出て

きました。何かと思つて手に取つてしまつたのですが手榴弾でした。思わず周囲に「手榴弾出ました」とお知らせしたのですが、本当は触つてはいけません。危険物と思われるものを発見した場合に触らずに、すぐに自衛隊の弾薬班の要員を呼ばなくてははいけません。しかし、それとは気づかずうっかり手にとつてしまつたのです。あいにく陸自の弾薬班の要員も現場にはおらず、どうしたものかと思はし眺めていました。作業現場には複数の鹿島建設の作業員さんが同行しており様々な手助けをしてくれたのですが、この時もベテラン作業員さんがすかさず受け取りどこかへ移動させてくれました。ピンの穴までクッキリ見え、あとから思えば非常に危険な行いであつたと反省することしきりです。

次回以降参加される方は、ぜひ気を付けて、私のような危険な行動をとらないよう重ねてお願い申し上げます(因みに、九九式手榴弾と思われま)

2月4日午前海自、8日と10日はそれぞれ午前海自、午後空自の隊員さんが作業応援にこられました。お話を伺つたのですが、ほぼ皆様「硫黄島に勤務しているが、遺骨収集には参加したことがないので、ぜひ一度は参加したかった」とのことでした。硫黄島での任期の終わりが近い方が多かつたように思います。

この応援がパワフルで大変大きな力となりました。皆さん固い岩盤もなんのその、大きな石もあつという間に掘り出して自衛隊の底力を見せてくれました。

4日は他にも忘れられない出来事がありました。翌日は日曜で休養日なので作業はお休みとなります。

そのため、月曜から作業を行う予定の183X地表面55という現場を作業終りに2班全員で下見に行きました。

先に発見し保存されていたご遺骨の養生を外すと、土に埋まつた鉄兜の中からゴロリと頭蓋骨が落ちてきたのです。

これは月曜日まで放置するわけにはいかないと、国立科学博物館の坂上先生が丁寧に取り出し、その日奉持して宿舎へと持ち帰り、仮安置所に他のご遺骨と共に安置しました。

この方は後に顎、歯などのご遺骨と桜に錨のボタンも見つかり、先生によると、10代後半から20代前半の方のご遺骨であろうとの鑑定結果でした。

戦後78年を経た今日でもそのような生々しい形でご遺骨が発見される現場を目の当たりにして、いまだ1万余柱のご遺骨が内地に戻れていない現実をあらためて考えさせられると共に、あの光景は一生忘れることはないでしょう。

翌5日日曜日は休養日で作業はお休



遺骨収集活動の様子

みでしたが、私を含め初めて硫黄島に来た人を集めて摺鉢山登山が計画されました。案内は運よく厚生労働省の島内の地理に詳しい方が名乗り出てくださいました。遺骨収集には宿舎の外を一人で出歩いてはいけない、遠出は必ず地理に詳しい人と行う等のルールがあります。

朝7時に出発し、ジャングルの中に作られた道を歩き、途中穴に落ちたシャーマン戦車、集団埋葬地跡、勇み足砲台と呼ばれる水平砲台を経て摺鉢山に登り、頂上にある硫黄島戦没者顕彰碑に内地から運んだ1畝のお水を献水し拝礼しました。午後は宿舎の近くの慰霊碑を拝礼し資料館にも行くことができました。

6日はこの派遣期間で唯一雨のため、作業が午後3時で打ち切りとなりました。派遣期間中は毎日の作業で疲労困憊し、早い日では夜8時、通常でも22時の消灯と共に就寝し、起床時刻の4時45分まで全く目を覚ますことなく熟睡した日々でした。

硫黄島はこの時期真冬で、朝食に向かう朝5時半の時点では真っ暗で非常に肌寒く、上着がなければ風邪を引きそうなほどでしたが、朝食を終えて宿舎に戻る6時には日が昇り気温も26度ぐらいになっていました。

南国の気象そのものといった感じでしたが、何度も参加されている方に聞いたところ、夏場は地表の作業では陽射しを遮るものがなく、壕内では中の温度が50〜60度になるので本当に大変なのだとお話されてきました。

宿舎は今回も海自の外來棟BEQ-Aの2階でした。2人部屋を一人で使い、トイレ・シャワーは隣室と共用、部屋の水は洗顔・歯磨きには使えるが、絶対に飲まないようにとのことでした。確かに水はうつつすらと色がつき、草の香りがしました。しかし、人間とは環境に慣れるもので、3日もすると違和感なく使うことができました。

飲料水は1階の冷水器から各自水筒やペットボトルに入れて部屋に持ち帰ります。コロナのため食卓でもパーティションに区切られた一人ずつの場所

個食・黙食となり、派遣団の仲間の皆様とはなかなかゆつくりと話をする機会もありませんでしたが、唯一外の非常階段の踊り場では多くの話をすることができました。

摺鉢山とジャングルと綺麗な海が見え、不思議と穏やかな気持ちになる場所でした。クジラの親子が潮を吹くところが見られたのも一生の貴重な思い出です。

10日午後には初めて洗骨の作業を手伝いました。洗骨と言っても水で洗うわけではなく、泥などをブラシや串などで落とし、できる限り綺麗にする作業です。年月を経て非常に脆くなっているご遺骨を壊すことなく可能な限り綺麗にして内地に戻すためです。

私は初心者だったため、できるだけ大きな部位で破損の可能性が少ないご遺骨を担当しましたが、神経を集中し一つ一つ心を込めて洗骨を行いました。洗骨後のご遺骨は鑑定され一個体ずつ白い袋に入れられて、さらに白い布で覆われた箱に入れられて我々収集団員に奉持されて内地に戻ります。

13日まで、日々の作業は怪我や事故などもなく順調に進み、今回の遺骨収集では22柱をみつけることができ、島内の厚生労働省安置室に保管されていた3柱と合わせて25柱と共に内地に帰還することができました。

また発見された弾薬は、小銃弾、艦砲弾、手榴弾等合わせて1177発でした。これは1班が作業したトーチカ内部に原形をとどめた機銃と多くの機銃弾が発見されたことにより、一度海岸で爆破処理されるとのことでした。

14日には再び天山「戦没者慰霊の碑」を訪れ追悼式が行われ、15日に離島、16日11時より千鳥ヶ淵戦没者墓苑での遺骨引渡式において厚生労働省職員にご遺骨を引渡し、解団式の終了をもって全ての行程が終わりました。

今回の硫黄島での経験は一生忘れることのできない貴重なものとなりました。できることならば、再度島へ行き、また作業に加わりたいと思うほどです。最後になりましたが、今回の派遣のためにご尽力いただいた大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の伊藤様、現地でお世話になった推進協会の山下様、昨年のご経験を詳しく教えていただいた水交会渡部様、そして何より多くの資料を集めて派遣を応援して下さいました水交会前事務局長の長谷川様にこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。



令和4年度硫黄島第4回派遣団員

硫黄島離島時の様子

事務局からの報告等

一 令和5年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊」の齎行

7月8日(土)、靖国神社において当協議会が参加諸団体と共に挙行した「令和5年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、コロナ禍を経て4年振りに直会まで実施しましたが、会員団体・個人をはじめとする皆様のご支援、ご協力を得て、滞り無くする全ての行事を齎行することができました。

なお、令和6年度の大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭は、令和6年7月6日(土)に行う予定です。

二 業務・会計監査の実施

4月28日、当協議会事務局において令和4年度業務・会計監査を受けました。

監査の結果、事業は適正に行われており、経理についても異常は認められませんでした。

- 監査人
・ 中井 真人 (公認会計士)
・ 若松 重英

三 令和5年度第1回通常理事会及び定時評議員会の開催

(一) 通常理事会
5月17日、当協議会事務局において令和4年度第1回通常理事会を開催し

ました。

本会議では事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、それぞれ原案の通り承認されました。

議案

- ①令和 4 年度事業報告書
  - ②令和 4 年度決算報告
  - ③役員を選任等
  - ④令和 5 年度定時評議員会の開催
  - ⑤会長の選任
- 理事 10 名及び監事 1 名が出席

(二) 定時評議員会

6 月 1 日、令和 5 年度定時評議員会を開催しました。

本会議では事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、それぞれ原案の通り承認されました。

議案

- ①令和 4 年度事業報告書
  - ②令和 4 年度決算報告
  - ③令和 5 年度事業計画及び収支予算書 (報告)
  - ④役員を選任
  - ⑤評議員の選任
  - ⑥会長の選任 (報告)
- 評議員 7 名が出席

四 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

令和 5 年度第 1 回派遣 (7 月 25 日～8 月 10 日) に偕行社から 2 名が参加されました。

五 新入会員紹介 (敬称略)

(令和 5 年 3 月 21 日～8 月 20 日)

【正会員】

駆逐艦菊月会

(正会員の新規入会は 7 年振り)

【賛助会員】

- 及川 輝彦 片岡 正徳 中村 剛
  - 林 弘明 宮崎英次郎 柳下 進
- 賛助会員 6 名

六 安倍昭恵新会長靖國神社に参拝

令和 5 年 8 月 1 日付で就任した安倍昭恵新会長が、8 月 9 日靖國神社に正式参拝しました。



山谷えり子顧問・安倍昭恵会長  
山口建史宮司・山下理事長



拝 殿 前

七 靖國神社永代神楽祭への参列

永代神楽祭奉奏日の 4 月 28 日山下理事長他有志 6 名が参列しました。



寄付金の税額控除に係る  
領収書の送付について

当協議会は、租税特別措置法に基づき税額控除対象法人に認定されております。

従来、5000 円以上の年会費・寄付金を頂いている方に領収書及び証明書(写し)を送付しておりますが、本年度も同様の処置をさせていただきます。なお、本送付は、12 月中の発送を予定しておりますので、ご了承下さい。

また、5000 円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書(写し)をご希望の方は、ご遠慮なく電話・メール等で事務局までお申し出下さい。

新規会員獲得への協力をお願い

当協議会は、有志会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う、多くの皆様の当協議会への入会を心からお待ち申し上げます。

既会員の皆様には、お知り合いの方の入会勧誘について、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は 次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)  
年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別御芳志の賛助会員)  
年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)  
年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する企業・法人団体)  
年会費 一口一〇〇〇〇円

(二口以上)

振込先口座番号 (郵便振替口座)  
〇〇一四〇・六・三三四九三〇

(当協議会へ事前に連絡をいただければ、振込料無料の振込用紙付「入会のしおり」をお届けいたします。)

「令和6年版靖國カレンダー」の紹介

英霊にこたえる会の「令和6年版靖國カレンダー」が頒布されます。

頒布価格は、購入部数ごと下表の通りです。

購入ご希望の方は、購入部数に応じた下表の金額を郵便局（ゆちょ銀行）備え付けの「払込取扱票」を使用して振り込んで下さい。  
 なお、振込手数料はご本人負担となります。

カレンダーの内容は次の通りです。

●靖國神社と護国神社の写真を中心に、季節感溢れる写真で構成しました。

●英霊にまつわる写真と遺書・逸話等を掲載しております。

●中綴じタイプのカレンダーとなっています。

表紙サイズ 縦25cm×横35cm  
 本文サイズ 縦50cm×横35cm  
 (見開き使用時)

■問い合わせ先  
 英霊にこたえる会

靖國カレンダー業務室  
 電話 03 (3264) 4610  
 FAX 03 (3261) 7415

■申し込みの方法  
 郵便局備え付けの郵便振替用紙に、

左記の記載例を参考にして必要事項を書き込み送金して下さい。

なお、カレンダー送付先となりますので、**住所・氏名・連絡先電話番号**も忘れずに記入して下さい。  
 振込先口座記号・番号  
 0016002170431

ホームページも参考にして下さい。  
<https://www.eirenikotaerukai.com/goods/>

**払込取扱票**

口座記号・番号はお間違えのないよう記入してください。

00	0	0	1	6	0	2	7	0	4	3	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

金額 料金 備考

英霊にこたえる会 靖國カレンダー業務室

令和5年度維持会費 口分 ¥ \_\_\_\_\_  
 (6年版靖國カレンダー) 送料 ¥ \_\_\_\_\_  
 合計 ¥ \_\_\_\_\_

住所 \_\_\_\_\_  
 氏名 \_\_\_\_\_  
 電話番号 \_\_\_\_\_

**振替払込請求書兼受領証**

記載事項を訂正した場合はその箇所を訂正を押印してください。  
 切り取らないでください。

0	0	1	6	0	2	7	0	4	3	1
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

英霊にこたえる会 靖國カレンダー業務室

おなまえ \_\_\_\_\_  
 ご依頼人 \_\_\_\_\_  
 日付 \_\_\_\_\_

**靖國カレンダー申込金額** 単位：円

部数 維持会費口数	カレンダー 料金	送料	合計金額
1	500	300	800
2	1,000	350	1,350
3	1,500	500	2,000
4	2,000	500	2,500
5	2,500	700	3,200
6	3,000	1,100	4,100
7	3,500	1,100	4,600
8	4,000	1,100	5,100
9	4,500	1,100	5,600
10	5,000	1,100	6,100
11	5,500	1,100	6,600
12	6,000	1,100	7,100
13	6,500	1,100	7,600
14	7,000	1,100	8,100
15	7,500	1,100	8,600
16	8,000	1,100	9,100
17	8,500	1,100	9,600
18	9,000	1,100	10,100
19	9,500	1,100	10,600
20	10,000	1,100	11,100

令和6年版

「靖國カレンダー」を一家に一部掲げましょう

- 靖國神社への総理・閣僚の公式参拝を定着させましょう
- 靖國神社は、我が国の戦没者追悼の中心的施設である
- 国家・国民がこそって戦没者英霊に感謝の誠を捧げましょう
- 英霊顕彰の国民運動の輪をひろげましょう

靖國カレンダー

英霊にこたえる  
一億国民のこころを結集しよう

▲これは縮小版です。原寸は縦50×横35cmです。

1-2月 靖國神社正月風景

3-4月 水戸飛行場跡地に整備された国営ひたち海浜公園(春のネモフィラ)

5-6月 御祭神40,800余柱・山形縣護国神社

7-8月 3万灯の提灯が彩る令和4年靖國神社おたまつり(毎年7月13日~16日)

9-10月 秋の広敷城(戦前は広敷城砲台に陸軍病院など軍の施設が多数存在した)

11-12月 御祭神177,900余柱・沖縄縣護国神社

英霊にこたえる会

英霊とは